ガザの時代に(再)定義される人種差別
―大量虐殺、人種主義、資本と国家―

サウザー・アシュリ

要　約

本稿は、アメリカ合衆国内の人種差別と、21 世紀の今でも依然、人種差別が人々の分断統制のめに利用される現実を論じる。

近年、アメリカ国内のガザ戦争への反戦行動が、「反人種差別」の名目で抑圧されている。企業寄りの新自由主義的リベラル層が取り込まれ、60 年代の公民権運動の核心であった構造的不平等批判が放棄され、「人種差別」および「反人種差別」の概念が歪曲されている。今、1967 年にキング牧師が指摘した人種差別と軍国主義と極端な唯物主義との関連性が浮き彫りになる。私は、アルベール・カミュの『転落』中の人物にアメリカの企業リベラル派の人種差別理解の浅薄さを語らせる。彼らは社会の不平等よりも体裁を保つことに重きを置き、問題に向き合わない。

次いでアメリカの軍国主義と帝国主義が、アラブ系アメリカ人を西洋文明への脅威と見做すことを正当化していることを論じる。

本稿は最後に、アメリカ左派による「文化戦争」論が問題の皮層のみを議論するために人種差別（そして反人種差別）が人々を分断し支配するために利用され続けていることを批判する。人種差別の火種は個人の内心で生まれるとしても、私たちは、権力がそれを支配のために扇動していることを確認すべきである。人種差別への有効な反撃は、多様な人々がこの構造を認識し、共に「立ち上がる」連合を通じてのみ可能だ。

キーワード：構造的な人種差別、ガザ虐殺、企業新自由主義、カミュ

1. 炎を煽る風

人種差別は長い間存在してきた問題である。人種差別は完全に非論理的であり、すべての人間には生来の尊厳と価値があるという信念に反するものである。違いがあるからこそ、私たちには比較優位性があり、それが合わさるこ

とで、人間の経験をより幅広く理解することができるのだ。しかし人種差別は、私たちを束縛し、閉じ込め、小さくし、劣った存在にすることで、社会がこうした恩恵を受けることを否定する。アメリカ南部のアラバマで育った私は、人種差別に遭遇したことを覚えている。私の隣人は、いつもポーチでピーカンナッツの殻をむいていた白人の老人だったが、ある日心臓発作を起こして病院に運ばれた。彼はいつも私に親切にしてくれたが、死に際に、たまたま黒人の患者と同じ部屋に入れられたことに最後の力を振り絞って抗議した。このような人種的憎悪の根強さには本当に唖然とさせられるが、それは私たちが生まれながらにしてもっている社会的背景の中にあるものであり、この状況を改善するためには、その起源と、それを制度化している社会的、政治的、経済的な力の両方を理解しなければならない。人種差別の火種は、人間の心や精神の中に生まれながらにして存在している。しかし、それを止められない炎へと扇ぎ、人々を分断し支配するために利用する風は、別の場所から吹いてくる。こうした炎を燃え上がらせる物質主義と軍国主義を認識することは、今日の人種差別の原因を理解するために不可欠である。そして人種差別を減らすことは、私たちの文化と社会の可能性を最大限に引き出すために不可欠である。私たちのすべての伝統の最良のものが、互いに補完し合うのである。

人種差別にはさまざまな形がある。同語反復的に言えば、違いにたいする軽蔑的な態度である。アラバマ州のように肌の色素の違いであったり、バルカン半島のように宗教のような進化した社会的伝統であったりする。偏見は人間社会に生来備わっているものであり、私たちの精神に根ざしていると主張することはできるが、人種差別に関する学術的研究はかなり新しい。最初の試みのひとつは、人類学者ルース・ベネディッツの『人種と人種差別』である［Benedict, 1943］。このような内集団／外集団の偏見は、時間の経過とともに社会構造として定着し、社会経済的地位や地理的位置における不平等につながる。これらは経済的な力によって定着し、政治的アイデンティティを含むさまざまなアイデンティティの層によって強化される。人種差別は、物質的な利益のために人々を分断したり、組織化したりしたいときに引くのに便利なことである。20 世紀後半に白人有権者を組織化するために、強制的な統合にたいする人種差別的な恐怖と憤りを利用した保守政党の「南部戦略」が、アメリカにおけるその一例である。アメリカのリンドン・ジョンソン大統領の有名な言葉である。「最下層の白人に、自分が最上の有色人種よりも優れていると思わせることができれば、彼はあなたが彼の懐を狙っていることに気づかないだろう。そしてもし彼を見下すような人間を与えれば、彼はあなたのためにポケットを空っぽにするだろう」［Moyers, 1988］。人種差別を目的（経済的、政治的）

の手段として利用しようとする権力者たちの冷笑的な態度は、なぜ人種差別がこれほどまでに頑迷なのかを理解する鍵である。また、このことを理解することは、今日の私たちを苦しめている戦争の蔓延を理解する上で重要な視点を与えてくれる。本稿では、人種差別の皮肉な利用が、ガザの状況にどのような形で寄与してきたかを見ていきたい。

シオニズムとは、ユダヤ人が伝統的な（聖書の）故郷であるシオン山に戻ることを公言する運動である。シオンは、紀元 70 年にローマ帝国に追い出され、エルサレムの神殿を破壊されたイスラエル民族の祖国である。ヨーロッパや世界のさまざまな国でディアスポラとして暮らしながら、ユダヤ人の家族は毎年、過越の祭という宗教的なお祭りで「来年はエルサレムで」と誓った。当時は現実的でなかったという理由と、ユダヤ教の神秘主義的な伝統の中には精神的な成長（内的シオン）を重視するものもあったため、これは物質的、政治的な運動ではなく、何世紀にもわたって精神的な運動であった。旧約聖書の出エジプトと約束の地への帰還の物語は、抑圧された人々にとって寓話的な意味をもっている（レゲエ音楽におけるシオンへの言及を参照）［Chevvanes, 1977］。これが 17 世紀後半に変化したのは、テオドール・ヘルツェルが 1896 年に小冊子『ユダヤ人の国家』でシオニズムを現実的な思想にしたときだ。彼は国家を実現するためにパレスチナに移住するユダヤ人を組織した。移住の理由となったのは、彼の故郷であるハンガリーやヨーロッパ全土における激しい反ユダヤ主義であった。ヨーロッパのユダヤ人たちは、何世紀にもわたる過酷な扱い、不当な課税、国外追放の脅威、社会的排除、ユダヤ人にたいする集団的な襲撃や虐殺を伴う反ユダヤ暴動であるポグロムに耐えてきた。安全保障と帰属意識を求める人間の欲求は、シオニズムを理解する鍵である。ヨーロッパのユダヤ人社会では、移民だけが反ユダヤ主義にたいする答えではなかったことに注目することが重要である。Doikayt（ドイケイト：イディッシュ語で「ここらしさ」を意味する）は、差別を克服し、彼らの住む国での共存を培うことを強調したオルタナティブな運動であった。［Wolf, 2013］。しかし、第二次世界大戦のホロコースト後に加速し、当時イギリスが統治していたパレスチナへのユダヤ人移民を増加させ、1947 年にパレスチナの一部にユダヤ人の国家を建国するという国連の宣言に結実した。ナチスから逃れてパレスチナに移住した若いユダヤ人を支援したハンナ・アーレントは、反ユダヤ主義がパレスチナへのユダヤ人移住の背景にあっただけでなく、それを「推進」するために利用されたことを語っている。アーレントによれば、ヘルツェルは自国からユダヤ人を排除しようと躍起になっていた反ユダヤ主義的なヨーロッパの指導者たちに援助を求めた。ヘルツェルの言葉を借りれば、反ユダヤ主義は神殿破壊以来のユダヤ人の苦しみの原因で

ある「推進力」であり、ユダヤ人がその利用法を学ぶまで、ユダヤ人を苦しめ続けるだろう。専門家の手にかかれば、この「推進力」はユダヤ人の生活にとって最も有益な要因となる［Arrendt, 1946］。

パレスチナが「土地なき民のための民なき土地」であるという、シオニズムの推進に使われた神話は検証に値する。これはヨーロッパの植民地支配の教義である「テラ・ヌリウス」（ラテン語で「誰の土地でもない」）に関連している。たとえそこにすでに人が住んでいたとしても、土地を奪うことを正当化するためによく使われた。アメリカの「マニフェスト・デスティニー（運命共同体）」という考え方も関連している。アメリカ白人は、土地を開拓するのは自分たちの運命であり、それは神から遣されたものだと信じていた。ナンシー・アイゼンバーグが指摘するように、そこに住んでいた原住民はそれを適切に利用していなかったとされた［Isenberg, 2016］。イスラエルの第 4 代首相ゴルダ・メイルが「パレスチナ人など存在しない」と主張したのも、これと同じ考え方である［Sunday Times, 1969］。彼女は、ウェストファリア的な意味で国際的に認められた国境をもつパレスチナという主権国家が存在したことがないという事実に言及していた。しかし、これでは民族の存在や価値が、西欧型の国民国家における市民権に縛られてしまう。ここで、国家の安全保障と人間の安全保障の間の緊張関係が浮き彫りになる。ハンナ・アーレントが述べているように、ユダヤ人は、国家が人間の安全を保障する唯一の存在であったヨーロッパの環境において、無国籍を経験した。したがって、彼らは悪辣な国家権力にたいして無防備であり、アーレントが言うように「余計な人間」とされたのである［Arrendt, 1973］。そして今、ユダヤ人の国家権の代償として、この条件がパレスチナ人に転嫁された。今日ガザで起きていることは、1948 年に始まったことの続きであり、新しいユダヤ人国家のためにパレスチナ人家族を家から追放することである。まず、パレスチナ人はヨルダン川西岸地区とガザ地区に押し込められ、そして今、そこから押し出されようとしている。60 年以上にわたる軍事占領と漸進的な追放は、南アフリカのアパルトヘイト制度になぞらえられ、イスラエル専用道路がパレスチナの町や村を二分し、恣意的な逮捕が行われ、占領国の権利に関するジュネーブ条約に違反するパレスチナ人の法的保護はほとんどない。人間性の悲しい証として、イスラエル人のパレスチナ人にたいする人種差別が見られる。元首相のメナヒム・ベギンは、イスラエルの議会でパレスチナ人を「二本足で歩く獣」と呼び、国防相もこれに共鳴して、ガザの住民を飢えさせることを正当化するために彼らを「人間の動物」と呼んだ［Kapeliouk, 1982］、［Times of Israel, 2023］。パレスチナ人の人間性を奪うことは、おそらく、彼らの土地を奪うために必要なことなのだろう。われわれと同じ普通の人間よりも、われ

われにとって脅威であり、悪意があり、臆病な動物の組織的な搾取や抑圧を正当化するほうが簡単だからだ。このように、ヨーロッパのユダヤ人とヨルダン川西岸やガザのパレスチナ人の双方にとって、人種差別と基本的な人間の尊厳の否定は、人種差別が国家建設と戦争の両方に役立つ方法を構成している。

2. アメリカ合衆国における人種差別と反人種差別：定義の変遷

過去 10 年間、米国における人種問題について批判的視点からの議論が前面に出てきた。「批判的人種理論」学派の学者たちは、アメリカに構造的に根付いた白人至上主義の是正を模索してきた。この理論は公民権運動の弁護士であり活動家でもあるデリック・ベルによって提唱された。当初は、法的構造に根ざした不平等への法的挑戦と、公民権法成立に至るアフリカ系アメリカ人の物質的進歩に基づいて構築されたが、学者たちは社会批判を拡大し、差別の構造的かつ強固な根源を強調した。キンバーリー・クレンショー、アラン・フリーマン、シェリル・ハリス、パトリシア・J・ウィリアムズ、チャールズ・R・ローレンス、マリ・マツダ、リチャード・デルガドら多様な研究者がこの分野を発展させた。

彼らは法学者であり、法的観点から構造的不平等を批判的に分析した。それぞれが独自の貢献を果たした。キンバーリー・クレンショーは、インター・セクショナリティ（差性理論）を導入した。抑圧のシステム（人種、性別、階級など）が相互に絡み合い、特に黒人女性にとって独自の経験を形成するという考え方である。彼女は CRT（クリティカル・レイス・セオリー／批判的人種理論）の創始者の一人であり、構造的人種差別と人種を無視する法的アプローチの限界を強調した。アラン・フリーマンは差別法における「加害者視点」と「被害者視点」の区別で知られる。裁判所が人種差別を個人の意図的行為のみと捉え、制度的・構造的被害を無視しがちだと論じた。シェリル・ハリスは「白人性を財産として捉える」概念で著名である。白人性が歴史的に法的・社会的資産として機能し、財産所有と同様の特権・権利・利益を付与してきたと指摘した。パトリシア・J・ウィリアムズは法学、自伝、物語を融合させ、日常的相互作用や法的構造内で人種差別が如何に微妙に作用するかを明らかにする。彼女は主観性、アイデンティティ、人種的従属の感情的側面といったテーマを探求する。チャールズ・R・ローレンス三世は「無意識の人種差別」理論を提唱し、多くの人種的偏見は意識下で機能すると論じた。差別を立証するのに意図を必要とすべきではないと主張し、人種差別は社会的規範や制度に深く根ざしていると指摘した。マリ・マツダはヘイトスピーチ分析の枠組みを構築し、標的となったコミュニティに与えられる危害を認める法的対応を提唱した。被抑圧的に生きる人々が、法が如

何に不平等を維持するかを理解する上で重要な洞察を提供すると強調する。リチャード・デルガドは、有色人種が語る「対抗物語」が支配的な人種的ナラティブにどう挑戦するかを示した。1980 ～ 90 年代には、アメリカは人種差別を乗り越えたという主流の認識があり、個人の人種を無視したり認めなかったりすることが公平だと考えられていた。この考え方は「カラーブラインド」と呼ばれた。しかしデルガドは、カラーブラインドや能力主義を、構造的人種差別を覆い隠すイデオロギーとして批判している。社会における進歩的変革と歴史的に周縁化された少数派集団の解放をいかに達成すべきかについて、異なる思想が生まれた。これらの異なるアプローチは、人種と人種的アイデンティティにたいする異なる理解に支えられていた。バーバラ・フィールズやカレン・フィールズら研究者は著書『レイスクラフト』において、「人種」が客観的・科学的に定義された現実ではなく社会的構築物である事実を強調した。カレン・フィールズのこの引用は彼女の主張を端的に表している。「人種は人間の生物学的要素（酸素を呼吸したり性的に生殖したりすることのような）ではない。また、それ自体が永遠に存続しうる概念（光速や円周率πのような）ですらない。人種は概念ではなくイデオロギーである。それは明確な歴史的瞬間に、合理的に理解可能な歴史的理由から生じ、同様の理由で変化しうるものである」［Fields, 2021］。

アルベルト・G・ウルキデスはおのずから「人種差別」の存在論的観点からの（再）定義を主張する。彼は人種が「社会的構築物」である点には同意しつつも、実践的な意味で人種を理解するには社会的文脈を考慮すべきだと論じる。彼は哲学者ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの言語学的研究を引用している。具体的には、ウルキデスがウィトゲンシュタインの言語に関する考え、すなわち1953 年に出版された『哲学的考察』における彼の「文法的アプローチ」を利用している。ウィトゲンシュタインは、概念は特定の理解のエコシステムの中で他の概念と相対的にしか定義できないと述べている。 簡単に言えば、「人種」や「人種的アイデンティティ」という概念は、比較対照される他の「人種」との関係においてのみ意味をもつというものである。1960 年代のマーティン・ルーサー・キング・ジュニアとマルコム X の場合と同様、批判的人種理論家たちもそのアプローチについて意見が分かれており、より協調的なアプローチを選ぶ者もいれば、戦闘的なアプローチを選ぶ者もいる。

『Insurrectionist Ethics（反乱者の倫理）』は、根強い構造的人種差別にたいして、より積極的な挑戦を提唱している［McBride, 2020］。あるレベルでは、社会におけるマイノリティの視点の認識と表象性が向上するという進歩が見られたものの、それは支配的な白人文化から怒りと不安をもって迎えられた。ここ数年の米国では、2020 年代初頭に批判的人種理論が一般に広く知られるよ

うになったが、現在では、政治化（左右表面的文化戦争的な）が進み、支配的な白人文化の中で主に否定的なイメージをもつようになるなど、かなりの揺らぎが見られる。これは主に、古い恐怖心を煽った結果である。現在の米国では、歴史にたいする批判的視点がますます「非アメリカ的」と見なされ、歴史博物館や教育機関から支配的な国家ナラティブに批判的な思想が排除されている。多くの白人アメリカ人が国内における文化的優位性を失うことへの不安 ── これは数十年にわたる米国の人口動態変化への反応である ── が燃料ではあったが、火種ではなかった。現在の激しい反動は現政権によって煽られている。火種を作ったとは言わないが、自らの利益のために炎を扇いでいるのだ。この「集団的地位喪失への恐怖」はアシュリー・ジャルディーナやグラント・シルバといった学者によって実証されている。白人が「包囲されている」という物語、さらには「置換理論」（リベラル派が白人多数派を少数派や移民で「置き換えよう」としているという陰謀論）さえもが保守派の間に浸透している。彼らにとって「批判的人種理論」は、子供たちを守らねばならない脅迫的なイデオロギーへと変貌した。これが米国が直面する分極化した環境である。

2020 年、警察によるアフリカ系アメリカ人射殺事件が相次いで大々的に報道されたことに端を発し、反人種主義者の怒りが爆発し、全国的な抗議デモが起こった。ミネソタ州でのジョージ・フロイド殺害事件が最も有名だが、その前後にサウスカロライナ州、ミズーリ州、シカゴ、ニューヨークで起きた警察の横暴事件は、1960 年代の公民権運動以来、全米で最大規模の抗議行動を引き起こし、一部の都市では夜間外出禁止令が出された［New York Times, 2021］。その最前線にいたのは、ゆるやかに組織化された「ブラック・ライブズ・マター（BLM）」運動であり、警察の横暴に抗議するだけでなく、アメリカにおける黒人の生活を特徴づけるようになった歴史的な不正義や構造的不平等が解決されていないことにたいする、長い間募っていた不満を表明した。この瞬間、過去に対する認識が大きく変化し、奴隷所有者や南部連合（とりわけ南北戦争中に奴隷制を維持するために戦った）に関連する何百もの銅像、旗、記念碑が取り壊されたり、撤去されたりした［NPR, 2021］。抗議のデモ行進は米国内にとどまらず、世界的に広がり日本にまで及んだ。2020 年代初頭にはダイバーシティが注目されるようになり、ダイバーシティ、エクイティ、インクルージョン・プログラム（DEI）が官民両部門で一般的になった。しかし、その勢いは長くは続かなかった。運動のエネルギーの多くが、マイノリティの「代表」として企業の役員に就任したり、映画やテレビに出演したりといった表面的な変化に注がれ、黒人や褐色の貧困層が直面する経済的不平等にたいする実質的かつ体系的な取り組みはほとんど行われなかった。人種差別は、より大きな社会

的・経済的問題ではなく、白人の心の中にのみ存在するものとして扱われた。こうして、警察官を含む多くの貧困層や労働者階級の白人が、歴史的・制度的不平等の矢面に立たされる一方で、権力者は比較的無傷で済んだ。白人アメリカ人の一部は、貧しい黒人や褐色人種と同じ経済的立場にあり、「特権を確認せよ」と言われ困惑した。一方、人種差別は、今度は反人種差別のポチョムキン村という形で、労働者階級を分断するという本来の任務を遂行し続けた［Time Magazine, 2019］。

2023 年、ハマス主導によるイスラエル南部への攻撃により 1,200 人のイスラエル人が死亡し、251 人の人質が奪われた。イスラエルが対応する必要性に当初は同情していたものの、ガザで膨大な民間人の犠牲者（最初の 1 年間で 40,000 人以上が死亡）が出始めたため、その必要性は薄れていった。大規模な抗議行動が再び世界中に広がり、イスラエルと武器を提供し国連で拒否権を行使して外交的援護を行う米国の双方に向けられた。世界各国からの大量虐殺の非難が広まっても、学校が破壊され家族が殺され、国際法がイスラエル軍によって無視されたガザでは、イスラエルがしばしば用いてきた「自衛」という正当化の言葉が、ますます空虚に響いた。多くの人々、特に学生が街頭やキャンパスでデモを行った。全米の大学キャンパスで「フリー・パレスチナ」や「今すぐ停戦せよ」の声が響き渡り、アメリカ政府への圧力が高まった［BBC, 2024］。環境は再び変化し、今度は保守系シンクタンク、ヘリテージ財団のアイデアという形で反応が現れた。悪名高い「プロジェクト 2025」の著者であるヘリテージ財団は、トランプ大統領の 2 期目の計画を詳述し、国境の強化、行政権の拡大、ヘルスケアや DEI のようなリベラルな政策の廃止を盛り込んだ。「プロジェクト・エスター」と呼ばれるこの計画は、反戦や親パレスチナ感情を反ユダヤ主義と同一視することを求めた。彼らによれば、15,000 人以上の罪のない子供たちを殺害していてもイスラエル軍を批判することは、人種差別主義者であるというのだ。彼らはまた、いかなる親パレスチナ活動も、アメリカ政府によってテロ組織とみなされているハマスと同一視しようとする。ヘリテージ財団のウェブサイトには、「アメリカの激しい反イスラエル、反シオニスト、反米の「親パレスチナ運動」は、世界的なハマス支援ネットワーク（HSN）の一部である」と書かれている。彼らは、平和運動の真の目的は「資本主義と民主主義の破壊」であると主張し、彼らをカール・マルクスやヒトラーと比較している［Heritage, 2024］。

ブラック・ライブズ・マター（BLM）の抗議運動はその頃には沈静化していたが、アメリカ社会にその痕跡を残していた。当時前面に出ていた言葉や感性は、ア

メリカ人の心の中にまだ残っていたのだ。保守系シンクタンクは、反戦運動を黙らせるために、この反レイシズムのメッセージを共用して、ガザでの停戦を求める人々を抑圧者、現在ガザを空爆しているイスラエル軍を抑圧された被害者と設定しようとした。報告書によれば、親パレスチナ派のデモ参加者は、ガザでの戦争を皮肉にも利用して「ジョージ・フロイドのようなセンターステージに躍り出るためのイベント」を行おうとしたとある［ibid］。彼らはこの例えをさらに発展させ、「パレスチナ」という言葉を聞くと、人々が「ナチス」、「共産主義者」、「クル・クラックス・クラン 」と考えるように、「物語をコントロールする」ことが彼らのプロジェクトの目標であると述べている。報告書は、「これこそがアメリカ人が「ハマス支援者 」や「ハマス支援ネットワーク 」と聞いたときに、プロジェクト・エステルが生み出そうとしている効果なのだ」と述べている［ibid］。

プロジェクト・エスターのターゲットのひとつは、教育システムであり、パレスチナについて教える教師たちである。ヘリテージ財団によれば、「アメリカの教育システムは、大学、高校、小学校のいたるところで、「親パレスチナ」、「反イスラエル」、「反シオニスト」の物語を装って反ユダヤ主義を助長している。反戦の声にたいする検閲の規模は前例がない。単なるシンクタンクの報告書にとどまらず、現政権はすでにこうした戦術の多くを実践し、公式の方針としている。ガザでの戦争について発言した者は誰でも、今や反ユダヤ主義者呼ばわりされている。アメリカの爆撃がガザの子どもたちに与えている恐ろしい人的被害を強調すれば、テロリスト呼ばわりされる。それだけにとどまらない。学位は取り消され、教師は解雇され、留学生は強制送還され、留学生の申請はすべて凍結されている。ハーバード大学のように、このような強権的な措置に抵抗してきた大学は、連邦政府からの資金提供の取り消しという処罰を受けている［New York Times, 2025］。実際に、教授陣がパレスチナについて話しているすべての大学のリストがあり、その横に括弧書きで「問題児」の数が記されている。本当にこれは前例がない。歴史家のエレン・シュレッカーは、これは1950年代の悪名高いマッカーシズム（マッカーシー主義）狩りよりもひどいものだと言う。「マッカーシーの時代には、教授個人だけを攻撃し、左派の課外政治活動みたいなものだけを攻撃していた。今日、ワシントンD.C.から出ている弾圧は、アメリカのキャンパスで起きていることすべてを攻撃している」とシュレッカーは言う［Democracy Now!, 2025a］。トランプ政権が及ぼしている被害は、まったくもって甚大なものであり、高等教育に関して、アメリカ人の生活において、これと同じようなことは前例がない。

「戦争は平和である」「自由は奴隷である」ジョージ・オーウェルの著書『1984年』に登場するこれらの「ダブルスピーク」の例は、（物語の中の）全体主義政権が言葉の意味を曖昧にし、操作するために用いたものだ［Orwell, 1949］。現在、「反ユダヤ主義」や「人種差別」という言葉がねじ曲げられ、同じことが行われている。実際、人種差別を正しく理解し識別することは、人種差別と闘うために決定的に重要であるため、これは特に危険である。人種差別を隠蔽し、人々の頭からその定義を奪い、現在の当局が自分たちの財政的・軍事的利益に資するものであれば何でもそれに結びつけることは、その作業を不可能にする。反ユダヤ主義は、戦うために警戒と感受性を必要とする現実の問題であるため、より狡猾である。歴史的に抑圧されてきたすべての少数民族と同様、ユダヤ人も尊厳ある生活を送り、自分たちの文化を育む自由を得る資格がある。反戦の声を封じるために反ユダヤ主義という言葉を援用することは悪意であり、反対しなければならない。

3. アメリカの企業リベラルとカミュ

キリスト教神学において、人類は「堕落した」存在であり、イエス・キリストを通じてのみ救済を得られる。人は自らの過失なく「堕落した」状態で生まれ、最初の人類であるアダムとイブ（禁断の果実を食べたことで子孫すべてに呪いをもたらした）から「原罪」を継承する。「原罪」という概念は、アメリカにおける人種差別を説明する際に用いられてきた。人種差別がアメリカの国家形成過程における重要な特徴であったことは歴史的事実である。しかし、それを「原罪」と呼ぶことは、白人アメリカ人がその事実を受け入れることをより困難にするのであって、容易にするものではない。過去の罪を償うためのアプローチは、支配的文化圏の多くの人々によって「白人としてのアイデンティティ」を全面的に非難するものとして認識されている。ルーシャス・アウトロー教授によれば、「人種的アイデンティティなしに人間が存在するとは不可能である。それは人類学的に必要不可欠なもの（人間にふさわしい社会的意味の要件）だからだ」［Outlaw, 2004］。構造的人種差別の罪を白人の心の奥底に帰するこのアプローチは、予想通り、人種と歴史に関するより進歩的な見解への反発を買ってきた。

この問題を別の角度から捉えることはできないだろうか？「白人としてのアイデンティティ」のように私たちが当然視している概念さえ、常にそうであったわけではない。文化や民族的背景が大きく異なるヨーロッパ人たちがアメリカに渡り、長い間自らを「白人」とは認識していなかった。イングランド人はアイルランド人を、北欧系は南欧系を差別した。差別対象の民族にたいする人

種的侮蔑語が横行し、人々は差別を逃れるため「民族色が強い名前」を伝統的なイングランド姓に変更せざるを得なかった。フランスから移住した私の祖父も、フランス語とわかる「ブラコニエ」を、より無難な「ブラウン」に変えて同化を図った。もちろんこれは「目立たない少数派」にしか選択肢として存在しなかったが、重要なのは「白人」というアイデンティティが特定の目的のために構築されたものであり、その目的を記憶に留める価値がある点だ。かつて異なる民族的アイデンティティをもち、経済階級によって分断されていた人々が、突然同じ集団の一員となった。エドワード・サイードがフランス革命について述べたように、国民主義を利用して民衆を統制した（農民が突然フランス人となった）のと同様、これは意図的な行為だった［Said, 1993］。かつて存在しなかった「白人」という社会的アイデンティティは、ヨーロッパのアウトグループが「有色人種」に置き換えられた時に初めて成立した（皮肉なことに、白は色ではない）。これにより複数の効果が生まれる。他の「有色人種」との対比によって、「白人」アイデンティティがデフォルトの国民的アイデンティティとなった。また、他の少数派よりも優遇されたことで、かつて差別を受けていた集団は新たな現状に「利害関係」をもつようになった。また、他のマイノリティよりも特権的な立場にある、かつて差別されていたグループは、新しい現状に「利害関係」をもつようになった。これは多くのアメリカ人にとって「通常の」アイデンティティの枠組みとなったが、ここで 2 つの点を指摘しておきたいと考える。まず、ベネディクト・アンダーソンが指摘したように、このアイデンティティは「想像された」ものであり、次に、それは分裂と支配、つまり権力者の地位維持を目的として作り出された物語であるということである。

しかし、2020 年代初頭の企業リベラルの「反人種差別」運動では、この区別がなされなかった。「白人アイデンティティ構築」の本来の目的を無知ゆえに、あるいは故意に無視し、人々を分断するために敷かれた同じ線路の上を歩んだのである。不平等の構造的原因を是正する試みすらせず、経済的に安全な「文化戦争」の領域で戦い、DI&E を奨励するような見せかけの美徳の誇示に焦点を当てた。企業リベラルの高尚を装った見せ物は、ある文学作品を想起させる。アルベール・カミュの小説『転落』に登場するジャン＝バティスト・クレマンスは、かつてパリで弁護士を務め、善行を働いたが、それは見せかけだけだった。彼は盲人の横断を手伝うが、その後必ず帽子を脱いで挨拶し、周囲に善行を見逃されないようにした。貧者への施し、無償の弁護活動、社会問題への姿勢など、彼が他者にたいして行ったことはすべて見せかけだった。しかしある日、橋を渡っているとき、自殺を考えている若い女性に出会う。彼女が飛び降りたとき、周りに誰もいなかったため、彼は助ける動機を見出せなかっ

た。彼の無私の仮面を剥がされ、彼は自分の道徳心が実はすべて自分のイメージのために奉仕していたことに気づく。打ちひしがれた彼は、アムステルダムの薄汚れたバーで見知らぬ人々に告白する日々を送った――それがこの本の舞台である。ある自己暴露的な独白の中で、彼と「正統派」パリ社交界の人々が「自由」についてどう考えていたかを語った。

> 昔々、私はいつも自由について語っていた。朝食にはトーストに自由を塗り、一日中噛みしめ、人前では息が自由の香りを漂わせていた。そのキーワードで反論する者を殴り倒し、欲望と権力に利用したのだ。[Camus, 1946]

かつての奴隷所有者の店の前を通りかかった時、彼は相手にたいして奴隷制度にたいする本音を口にした。

> 現代において、誰かが公然と「奴隷制こそが我が商売だ」と宣言する姿を想像できるだろうか？なんというスキャンダルだ！パリの同僚たちの声が今にも聞こえてきそうだ。彼らはこの件に関しては断固としており、躊躇なく二、三の宣言文を、いやそれ以上も発表するだろう！よく考えてみれば、私も彼らの署名に加わるだろう。奴隷制？ ── 絶対に反対だ！自宅や工場でそれを導入せざるを得ないのは ── まあ、それは当然だが、それを自慢するとは、まったくもって度を越している！ [ibid.]

奴隷制の実践は彼らにとって当然のことだったが、それを公然と認めることが罪であった。彼らは自ら利益を得ている経済モデルを疑問視しようとはしなかったが、公の場でその責任を免れようと固執した。最後に、カミュの登場人物は奴隷制にたいする本心を語る。クレマンスは言う：

> 支配せずとも、また仕えられずとも生きていけるものではないと、私はよく承知している。人間は新鮮な空気を必要とするように、奴隷を必要とする。命令することは呼吸することだ ── 同意するだろう？ 最も貧しい者でさえ呼吸はできる。社会階層の最下層の男でさえ、妻か子供はいる。未婚なら犬だ。結局のところ、肝心なのは、反論する権利のない相手に怒りをぶつけられることなのだ。[ibid.]

アルベール・カミュは1950年代のヨーロッパ社会の罪悪感、責任、そして不条理についてこの小説を書いたが、そのテーマは現代の私たちにも身近で

ある。権力構造に挑戦する代わりに、当時のリベラルなエリートも現代のエリートも、不正義に取り込まれ、それに順応している。彼らの努力がどれほど善意に満ちていたとしても、貧困層や労働者階級が共感できる問題に基づいた、真に横断的な反人種差別連合を構築する上で効果的ではなかった。人種差別と不平等の主因を、自らも属する経済構造に求める代わりに、彼らは歴史の重荷を個人の良心に押し付けた。しかしクレマンスとは異なり、リベラルなエリートたちは橋の上で自己啓示的な体験をしていない。おそらくガザが、その目覚めの呼びかけとなるだろう。

4. 受容される人種差別

人種差別的な侮蔑表現や差別的固定観念の助長は、建前社会では概ね受け入れられなくなった（ただし近年、再燃の兆しが見られる）。しかしアメリカでは、ある集団にたいしては最低限の人種差別が常に許容されてきた。その集団とはアラブ人である。黒人やラテン系と比較すると、米国全体のアラブ系移民人口は少ない（ヒスパニック系が 6500 万人超なのにたいし、アラブ系は 300 万人強）。人々がアラブ人やアラブ文化に触れる機会は、主に娯楽やニュースを通じてであった。娯楽におけるアラブ人の描写は、エドワード・サイードが定義した「オリエンタリズム」を構成する、より古いヨーロッパの固定観念に従っていた。ニュースでは、その文脈は通常、戦争や軍事介入であった。海兵隊の軍歌の冒頭にはリビアの「トリポリの海岸へ」と歌われる。この歌はアメリカ人なら誰でも知っている。この有名な軍歌がアラブ諸国への軍事介入に言及している事実は、アメリカとアラブ世界との間におけるそのような関係（侵略者／被侵略者）が当然のことであるという象徴である。アメリカ人のアラブ人像は、1970 年代のオイルショックとイラン革命、90 年代のリビア・アラビア湾での軍事行動、冷戦下でのテロ事件にも影響を受けた。

9.11 同時多発テロ後は人種差別が全国に広がった。この対立は、アメリカの政治学者サミュエル・ハンティントンの有名な著作『文明の衝突』で「文明の衝突」と位置づけられた。一方には「啓蒙された西洋文明」が、他方には「血塗られた境界線」をもつ伝統的な部族的イスラム世界があった［Huntington, 1993］。一般的な認識として、彼らは普遍的人権や自由民主主義といった我々の「価値観」を受け入れることができないと考えられていた。この主張は、文明そのもののための戦いという名目のもと、彼らにたいする暴力を正当化する助けとなった。これはハンティントンが 9.11 を予言したという意味ではないが、9.11 以降、多くのアメリカ人はなぜそのようなテロが発生したのかを理解したかっ

た。中東では、攻撃の原因としてアメリカの攻撃的な外交政策を認めるよりも、ハンティントンの分析の方が受け入れやすかった。こうして西洋人は自らを、未熟な民主主義を守るためペルシャ帝国の野蛮な大群と勇敢に戦うギリシャのスパルタ人の役割に当てはめた。様々な学者が、これは主に想像上の過去から構築された神話であり、実態よりもアイデンティティ構築に関わるものであることを示している［Bremmer, 1997］、［Bottici, 2014］。しかし実際には、この神話はアラブ人を大きく非人間化する役割を果たし、アメリカ国民の間で恐怖と嫌悪の社会的連鎖を助長した。当然ながら、「アラブ人に見える」者を標的とした憎悪犯罪が相次いだ。当時ワシントン D.C. に住んでいた私は、アラブ人の乗客が乗車した直後に、自分が乗っていた電車車両の乗客全員が次の駅で降りたことを鮮明に覚えている。当時私が通っていた大学の駐車場への往復時には、アラブ人学生に護衛サービスが提供されていた。これが、現在進行中のジェノサイドが起きている背景である。アラブ人にたいする根深い非人間化は、アメリカ人がこの紛争を「文明の衝突」の延長として容易に捉える一因となっている。アラブ人が民間人を殺害するのは彼らの本質ゆえだが、イスラエルが同様の行為を行うのは文明防衛という正当な理由によるやむを得ない選択とされる。我々が自己と他者に付与する特性は、世界を本質主義的に捉える視座を構成する。その一方で、西側の介入や侵略行為が米国にたいするアラブの反感の原因とは見なされないのだ。（例えば、CIA が石油のためにイランの民主的に選出された指導者を転覆させた時や、制裁がイラクで 50 万人の子どもの死を招いた時のように）、イスラエルによる数十年にわたる残忍な軍事占領と民族浄化は、2023 年 10 月 7 日にハマスが行った暴力の理由とは見なされない。したがって、この背景は明らかにアメリカ人がガザの状況を見る方法に影響を与えている。

5. 人種主義、極端な物質主義の正体

第二次世界大戦後の膨張した米国軍事予算はソ連の脅威によって正当化されてきたため、冷戦終結後、米国人は「平和の配当」を期待した。しかし軍事費は増加の一途をたどり、1990 年代以降倍増し、さらに三倍に膨れ上がった。一方で新自由主義経済政策により製造業の雇用が海外に流出、全米に「錆びついたベルト地帯」が点在する事態となった（ヘッジズ、2010 年）。The Center on Budget and Policy Priorities（CBPP）によれば、国内の貧困化に加え、社会保障網の縮小とサービスの民営化が進んだ結果、米国の子供 5 人に 1 人がフードスタンプ（食料配給券）に依存する状況に陥っている［CBPP, 2025］。

(CBPP とは、ワシントン D.C. に拠点を置く超党派の研究・政策機関であり、低所得層および中所得層のアメリカ人に影響を与える財政政策と公共プログラムに焦点を当てている)

その結果として生じた、貧困層や労働者階級の人々の不満は、通常ならリベラルな政治体制によって対処されるはずだった。しかしキャサリン・リウ教授が 2021 年の著書『Virtue Hoarders』で指摘するように、リベラル層は不満の構造的原因に対処する代わりに、傍流的なアイデンティティ政治に焦点を当てることを選んだ [Liu, 2021]。進歩的で理想主義的な言葉とは裏腹に、その行動は厳密に唯物論的で利益追求的であった。左派は、多くの労働者階級の人々が共感できないジェンダー問題の敏感な課題で先鋒的立場を取った。「左派」や「グローバリスト」に裏切られたと感じた多くの人々は、ナショナリズムや好戦主義、さらには人種差別的な世界観に魅せられた。人口構成の変化と経済的苦境は、ポピュリズムや排外主義的な言説の増加を伴った。マンフレッド・ボルネウェッサーによれば、「社会システムにおいて、外国人嫌悪の反応は、さらに損失への恐怖を反映している。この恐怖は、社会的地位、権利や特権の刻印、そして希少な資源の配分やアクセスに関するものである」と述べている。ローランド・S・マーティンは著書『ホワイト・フィア』の中で、現在の人口動態の傾向から、2043 年までに、アフリカ系、ラテン系、アジア系のアメリカ人が白人を数で上回ると述べている [Martin, 2022]。これにより、白人アメリカ人の間では、「自分たちの」国が奪われるという恐怖が高まっている。別の見方をすれば、これはアメリカ人であることの意味の根本的な変化である。なぜなら、これまでアメリカは、白人、アングロサクソン、プロテスタントという「公式の文化」を中心に組織されてきたからだ。この伝統的な国民的アイデンティティが脅威にさらされ、守らねばならないという感情は強い。伝統的な結婚観や性別観への挑戦に加え、経済的疎外への怒りや人口動態変化への恐怖は、アメリカの右派によって巧みに利用されてきた。検閲(非アメリカ的と見なされるものにたいする検閲)と権威主義的法の過剰適用が、アメリカの伝統的な法的制約に反する現在の政治情勢は、この背景なしには理解できない。一方、左派はかつて自らの象徴であった社会変革の遺産を空洞化することに忙殺されてきた。60 年代の公民権運動の遺産 ── それは人種問題だけでなく反戦・貧困層支援を掲げ、慢性的な不平等を終わらせるための真の構造的変革を求めたもの ── はその牙を抜かれてしまった。ハジャール・ヤズディハの著書『人民のキングをめぐる闘い』は、リベラル派がキングのメッセージをいかに取り込み、彼を無害で無力な「ぬいぐるみ」版へと変質させたかを明らかにしている [Yazdiha, 2023]。かつて恐れられ、中傷され、暗殺された鋭く痛烈な社会批評家としての姿は消え去った。そ

れは、モハメッド・アリも，ネルソン・マンデラも同じであると言える。社会への批判した時に「非国民」や「テロリスト」と呼ばれたが、数十年後英雄として称賛された。その結果、今日のアメリカ人は自らの状況を理解するための組織化された人間主義的道筋をもたない。政治的右派は報復と贖罪を掲げ、白人向けの被害者ナラティブを展開する。そこでは少数派とグローバリストエリートがアメリカ民主主義の敵と位置付けられる。左派は、海外では国際社会を責任をもって監督する慈悲深い帝国の正義の物語を、国内では抽象的で劇的な赦しを提供する。どちらも軍産複合体の存続を保証する。それは企業利益にひれ伏すか、寡頭支配に萎縮する帝国である。企業利益にひれ伏す帝国である。アメリカ人が前者のサディスティックな仮面を採用しようが、後者のマゾヒスティックな仮面を採用しようが、アメリカ製兵器の照準に囚われた者たちにとって、人種差別的な戦争経済の顔は変わらない。

6. 利益のための人種差別と軍国主義：GHF の事例

人種差別、経済的利益、軍国主義の結びつきを明らかに示す事例が、ガザ人道財団（GHF）である。国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の支援配布センター（ガザ地区全域に 400 以上存在）に代わるものとして構想された GHF は、UNRWA のフィリップ・ラザリーニ事務局長によれば、わずか 4 か所しか設置していない。しかもその全てがガザ地区南部に集中している［Lazzarini, 2025］。UNRWA はガザ地区の難民支援を担当する国連機関であり、約 75 年にわたりガザの難民約 100 万人にたいし、インフラ整備・教育・食糧支援を提供してきた。ガザ滞在経験から言えるのは、UNRWA がイスラエル占領下でパレスチナ人にガザでの生活を可能にする、最も信頼され強固な組織であるということだ。私が生徒たちが交流しているガザの子供たちが UNRWA の学校であり、厳しい状況下でも子どもたちに教育を提供してきた。まさにこの点が、イスラエルが UNRWA を根絶しようとした理由である。2024 年 10 月、同機関は「職員数名が 10 月 7 日のハマスによるイスラエル南部攻撃に協力した」との口実で、ガザでの活動が禁止された［Save the Children, 2025］。内部調査の結果、UNRWA はテロ攻撃に協力した 9 名の職員を解雇したが、それでもイスラエル議会は UNRWA の全面禁止を阻止しなかった。確かにこれはイスラエルの長年の目標であり、この事件は以前から望んでいた行動を正当化する機会と見なされた。ガザ地区のパレスチナ人に最低限の安定を提供し、現地でのイスラエルの行動を報告する国連の存在として、UNRWA はイスラエルの民族浄化政策にとって重大な障害となっていた。

イスラエルが UNRWA を、人道的でも財団でもない、陰険で皮肉な名称の GHF に置き換えたことで、このイスラエルの目的は明らかになった。100 の NGO が署名した書簡によれば、ガザへのほぼ全ての支援を遮断するイスラエルの政策は人為的な飢饉状態を招いており、文字通り飢餓政策である［Democracy Now!, 2025b］。彼らは絶望と飢餓を利用して、ガザ市民を食糧が入手可能な唯一の場所である南部へ強制移動させている。これはガザ地区中央に位置するガザ市から全てのパレスチナ人を排除する政策と一致する。さらに、GHF 配布拠点で提供される支援物資はわずかな量に過ぎず、戦闘地域を徒歩で移動して配布場所へたどり着くことを強いられている数十万の絶望的な人々にとって全く不十分である。現地では兵士による標的化が常態化しており、今年 7 月時点で支援物資の列に並んでいた飢餓状態の 1,000 人以上が射殺されている［BBC, 2025］。

内部告発者と BBC の報道により、この「人道支援」財団の実態が明るみに出た。元米特殊部隊グリーンベレーのアンソニー・アギラールは、配給拠点の警備を請け負う下請け業者に雇われていた。軍事の民営化の流れの中で、イスラエル軍は UG ソリューションズという下請け業者を通じて傭兵を雇用している。内部告発者は様々な人権侵害を目撃し、関与を拒否した。デモクラシー・ナウとのインタビューでアギラールは「我々アメリカは共犯だ。ガザで現在進行中の虐殺とジェノサイドに、手を携えて加担している」と語った［InfidelsMC ホームページ］。残念ながら、傭兵として雇われている退役特殊部隊員全員がそのような良心をもっているわけではない。実際、アラブ人を殺す機会を喜ぶ者もいる。BBC の調査によると、UG ソリューションズに雇われた者の多くは「インフィデルズ・モーターサイクル・クラブ」という人種差別的なバイカーギャングに所属している。このギャングはイラク戦争のアメリカ人退役軍人や民間軍事請負業者によって結成され、自らを現代の十字軍と称している。このギャングは激しい反イスラム主義者で、キリスト教の十字架をシンボルとして掲げ、メンバーの中には「1095」という日付のタトゥーを入れている者もいる。これはイスラム支配下の「聖地」を奪還するための最初のキリスト教十字軍が始まった年を意味している［ibid.］。ギャングのミッションステートメントにはこう記されている。「インフィデルズ MC は、世界中の自由と解放を脅かす過激なジハード運動を拒否する。インフィデルズ MC は、軍人として、軍を支援する請負業者として、そして祖国から戦闘部隊を支援する愛国的なアメリカ人として、テロリズムとの戦いを支援する」［ibid.］。

ガザの飢餓状態にある住民への支援物資配給を任されたのは、インフィデルズ（異教徒まがいの連中）のような人々である。彼らはその任務遂行のため、最新かつ最も致死性の高い武器で武装している。さらに卑劣なのは、BBC の

調査と元 UG 従業員へのインタビューによれば、請負業者には 1 日あたり最大 1,580 ドルという法外な報酬が支払われている点だ［BBC, 2025］。これは軍国主義と物質主義を推進するために人種差別が利用されている明白な事例である。数十万人が飢えと殺戮に晒される中、武器供給業者と兵器メーカーは巨額の利益を貪っている。キリスト教ナショナリズムの台頭が米国を席巻する今、時代錯誤的な十字軍のイメージが健在であることを目の当たりにしている。

7. 私たちが向かう先

ハンナ・アーレントは、「全体主義的支配の理想的な対象は、確信犯的なナチスや確信犯的な共産主義者ではなく、真と偽の区別がもはや存在しない人々である」と書いた［Arendt, 1973］。言葉、とりわけ人種差別のように重要な言葉を共用して操ることで、彼らは人々を混乱させ、自分で考える能力を阻害する。意味不明だとわかっていることを人々に信じさせることは、人々をコントロールする鍵であり、全体主義への重要な一歩である。今必要なのは、人種差別を明確に表現することであり、キング牧師が言ったように、人種差別の維持と制度化において軍国主義と極端な物質主義が果たす役割を理解することである［King, 1967］。人種差別主義者と軍国主義者の常套手段は、それに反対する人々の言葉や重要な概念を利用することである。陰湿だが効果的な戦略だ。しかし、すべての人々の尊厳にたいする畏敬の念に突き動かされた人々、そのような尊厳を保証する真の多元的社会を目指す人々は、騙されることも屈服させられることもない。各文化のユニークな貢献を正しく理解し賞賛することで、私たちはこれと闘うための横断的な連合を形成することができる。そのような社会は決して上からではなく、あらゆる伝統の最良のものから、下から生まれるという知識に勇気づけられる。ジェームズ・ボールドウィンは「他人を堕落させる者は自分自身を堕落させる 」と言った［Baldwin, 1963］。その反対もまた真実である。ハンナ・アーレントは、ユダヤ人がホロコーストから逃れるのを命がけで助けたデンマーク人についてこう書いている。他人の尊厳を守ることで、彼らは自分自身の尊厳を確認したのだ。全体主義体制は、人々が自分の頭で考えず、ある種の抑圧された「余計な人間 」がいることを受け入れるかどうかにかかっている。私たちが怖がるかどうかにかかっているのだ。正直言って、今は恐ろしい時代だ。しかし、アルベール・カミュの言葉を借りれば、「確かに、恐怖の風潮は内省を促すものではない。しかし、その恐怖を言い訳にするのではなく、現在の状況の主要な原因のひとつであると認識し、それにたいする救済策を見出すべきだと私は考えている［Camus, 1946］。

参考文献

Arendt Hannah, 1946, The Jewish State: 50 years after. *Foreign Policy Magazine*.

Arendt Hannah, 1973, *The Origins of Totalitarianism*. New York : Harcourt Brace Jovanovich.

Baldwin J., 1963, *The fire next time*. Dial Press.

BBC Website, 2025, Anti-Islamic US Biker Gang Members Run Security at Deadly Gaza Aid Sites. https://bbc.com/news/articles/cm2zy4l8jgeoBenedict Ruth, 1943, *Race and Racism*. Scientific Book Club, London.

Bottici Chiara, 2007, *A Philosophy of Political Myth*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bremmer Jan N., 1997, "Myth as Propaganda: Athens and Sparta." *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 117 (): pp.9–17.

Camus, Albert, 1946, *Neither Victims nor Executioners*. (*Ni victimes, ni bourreaux*). Combat.

Camus Albert, 1956, *The Fall*. Translated by Justin Obrien. Vintage Books: New York. p.9.

Center on Budget and Policy Prioritie, 2025, *The Food Stamps Critical Role in Helping Children*.www.cbpp.org. (retrieved Sept. 13th.)

Chevannes Barry, 1977, The Literature of Rastafari. *Social and Economic Studies* 26, no.2: pp.239–62. http://www.jstor.org/stable/27861657

Democracy Now, 2025a, *Worse Than McCarthyism: Historian Ellen Schrecker on Trump's War Against Universities & Students*.

Democracy Now!, 2025b, Website, "Designed as Death Traps" : Fmr. Green Beret Who Worked at.

Fields K. E. & Fields B. J., 2012, Racecraft: The soul of inequality in American life. *Verso*. p.111.

Frank Giles, 1969, Golda Meir: 'Who can blame Israel'. *Sunday Times*. p.12.

Gaza Food Sites Reveals Rampant War Crimes. "Designed as Death Traps" : Fmr. Green Beret Who Worked at Gaza Food Sites Reveals Rampant War Crimes ¦ Democracy Now!

Hajar Yazdiha, 2023, *The Struggle for the People's King: How Politics Transforms the Memory of the Civil Rights Movement*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Heritage Foundation, 2024, *Project Esther*. https://www.heritage.org/progressivism/report/project-esther-national-strategy-combat-antisemitism

Huntington, S. P., 1996, *The clash of civilizations and the remaking of world order.* Simon & Schuster.

Isenberg N, 2016, *White trash: The 400-year untold history of class in America*. Viking.. p. 19.

Infidels M homepage, infidelsmc.com

JOINT STATEMENT: As Mass Starvation Spreads Across Gaza, More Than 100 NGOs Make Save the Children website, 2025, An Urgent Plea to Allow in Life-saving Aid July 23. Mass Starvation Spreads Across Gaza as NGOs Make Plea ¦ Save the Children

Kapeliouk, Amnon, 1982, Begin and the Beasts. *New Statesman*, 25 June.

King, Martin Luther., 1967, *Beyond Vietnam*, Riverside Baptist Church,.

Liu Catherine, 2021, *Virtue Hoarders: The Case against the Professional Managerial Class*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.

Looker Rachel, 2024, Columbia University Cancels Main Graduation Amid Protests. *BBC* .

Moyers Bill, 1988, What a Real President was like. *The Washington Post. 13 November*.

McBride III, Lee A., 2020, *Ethics and Insurrection: A Pragmatism for the Oppressed*. London: Bloomsbury Academic.

Martin, Roland S., and Leah Lakins, 2022, *White Fear: How the Browning of America Is Making White Folks Lose Their Minds*. Dallas, TX: BenBella Books.

Newkirk Pamel, 2019, Diversity has become a Booming Business. So Where are the Results? *Time Magazine*.

New York Times., 2020, Black Lives Matter May be the biggest Movement in US History.

NPR., *Nearly 100 Confederate Monuments Removed In 2020, Report Says*. https://www.npr.org/2021/02/23/970610428/nearly-100-confederate-monuments-removed-in-2020-report-says-more-than-700-remai

New York Times, 2025, *Trump Intends to Cancel All Federal Funds Directed at Harvard*. https://www.nytimes.com/2025/05/27/us/harvard-trump-federal-funds.html

Orwell, G., 1984. *Harvill Secker. 1949*.

Outlaw Lucius T., 2004, Rehabilitate Racial Whiteness?. *What White Looks Like*, edited George Yancy. New York, Routledge. pp.175-188.

Philippe Lazzarini, 2025, Over 400 starving people reported killed since it started operating just a month ago. [Tweet]. X.

Said Edward., 1993, *Culture and Imperialism*. Knopf. p.16.

The Times of Israel, 2023, *Defense minister announces 'complete siege' of Gaza*.

Wolff Frank, 2013, The Home That Never Was: Rethinking Space and Memory in Late Nineteenth and Twentieth-Century Jewish History. *Historical Social Research / Historische Sozialforschung* 38, no.3 (145): pp.197–215.

Abstract

This paper describes racism in the United States and how, despite all the prog ress that has been made in the 21st century, it is still used to divide people for purposes of control. I give historical examples of how racism was leveraged as a functional tool of divide-and-control and of state-building. Recently, in the case of the US-supported war in Gaza, anti-war voices in America have been silenced using the pretext of "anti-racism." The co-option of the corporate neo-liberal left and the abandonment of the critique of structural inequality, a core component of the Civil Rights movement of the 1960s, have facilitated this twisting of "racism" and "anti-racism." Thus, exposing the connectivity of raci sm with militarism and extreme materialism, as was pointed out in 1967 by Dr. King. I address the shallow way that racism is treated in America by today's corporate liberals, likening them to characters depicted in Albert Camus' nov el, *The Fall*. Concerned less with actual social inequality and more with maint aining appearances, they fail to address the real issues. Racism towards Arab-Americans is addressed, pointing out how the atmosphere of normalized milita rism and imperialism in the United States has left them the victims of the last remaining "acceptable racism." This is justified by their characterization as a threat to western civilization, in the style of Huntington's *Clash of Civilizatio ns*. Finally, I argue against the American left's current "culture wars" focus on piffling surface issues, while racism (and anti-racism) continue to be used to divide and control people. We must recognize that the spark of racism may beg in in the hearts of individuals, but is fanned into a flame for the purposes of co ntrol by those in power. Racism can only be effectively confronted through a di verse coalition of people recognizing this, and "punching up" together.

Keywords: Structural racism, Gaza massacre, Corporate neoliberalism, Camus

サウザー・アシュリ（武田高等学校教員・広島市立大学平和研究所博士課程）